関西大学FDフォーラム

Vol.3

特集 1　ビデオを用いた大学の授業研究

- 京都大学制作の公開実験授業ビデオ・・・・・・・・・・・・ 2
- 演習篇「認知心理学(実験)」のビデオ制作にあたって・・・ 4
- ビデオによる授業の収録と研究交流・・・・・・・・・・・・ 6

2　2001年度後期(秋学期)「学生による授業評価アンケート」報告

- アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 授業評価アンケート結果を読む・・・・・・・・・・・・・・15

編集・発行
関西大学 全学共通教育推進機構
ＦＤ部門委員会・授業評価部門委員会
発 行 日
2002年7月5日

〒564－8680　大阪府吹田市山手町3-3-35
Tel 06-6368-1121　Fax 06-6368-0083
URL　http://www.kansai-u.ac.jp/

信頼感ある大学をめざして

全学共通教育推進機構長（副学長〔共通教育担当〕）河田 悌一

このところ日本では、政治においても、また企業界においても、人びとの信頼感を大きく失わせる事件が、多発している。その最も象徴的なものが、5月8日に中国の瀋陽で起こった日本総領事館への「亡命事件」だ。

中国の警官が治外法権である総領事館に侵入するのを黙認し、泣き叫ぶ母子を傍観してその警官に帽子を拾って手渡す領事館員の姿。おそらくあのテレビの映像をみて、衝撃をうけなかった人はいないだろう。

日本と中国両国の、あの事件にかんする“事実発表”について、世論調査では、いずれの発表にも「信用していない」と回答したものが 7割にのぼった、ということである（『朝日新聞』5月21日）。

このような信頼感の喪失状況のもとで、日本の大学は果たして、信用をえているのであろうか。

大学がレジャーランドだといった見方は少なくなってきているとしても、アメリカの多くの大学のように日本の大学が信頼されるための努力と発信をしているとは言い難い、のが事実である（讀売新聞大阪本社編『潰れる大学、潰れない大学』中公新書ラクレ）。

現在、日本の大学が問われているいちばん大きな問題は、何か。それは、入学してきた学生諸君を、情報機器がきちんと使いこなせるとともに、幅広い教養とかなりの専門知識を有し、しかも様々な課題や問題にたいして解答能力をもつ、自立した健全な市民として社会に送り出す、という大学教育の基本的役割がきちんとなされていないということだろう。

このような問題意識をもって、昨年12月、「第２回関西大学 FDフォーラム（シンポジウム）」が開催された。京都大学、大阪大学、関西学院大学をはじめとする大学関係者100余名が参加したこのシンポジウムでは、国公私立を問わず、学力低下がみられる大学での普遍的な問題点や疑問が、きわめて率直に話しあわれた。そして、どのような理念と方法論とシステムによって、学生を21世紀の日本にふさわしい人間像に教育してゆくかが、討論されたのだった。

その席上、本学３回生の学生から、教授が一方的に知識を注入する講義形式の授業ではなく、受講生の質問や意見発表の機会がより多くある、いわゆる学生参加型の授業をもっと開設してほしい、という要望が出されたことは、参加者に大きな刺激を与えた。

シンポジウムの終了後、ある他大学の教員から「あのような意見が、学生から出る関西大学には、教員と学生との間にまだ信頼感があるのですね」といわれたが、学生やその父母、さらには社会から信頼され、信用される大学になるための様々な努力を、真摯につづけてゆかなければ――との想いを強くする昨今である。

特集１ ビデオを用いた大学の授業研究

京都大学制作の公開実験授業ビデオ

京都大学高等教育教授システム開発センター教授 田中 毎実

平成１３年１２月５日（水）、関西大学尚文館マルチメディアAV大教室において開催された「第２回FDフォーラム」における報告である。

ただいま紹介していただきました田中です。京都大学で７年目になりますが、その間、高等教育教授システム開発センターで公開授業などの仕事をしながら、あちこちで話をしているんですが、行く先々で全然状況が違う。話の重点をどこにおくか難しいんです。そのなかでも国立大学はＦＤに使えという予算がついたので、どこの大学もＦＤをやらざるをえない。やらないと大変なことになるから、一律の動きがある。ところが、私立大学はバラバラなんです。東海大学のように突っ走っている場合もありますし、「一番いいのは、学生が授業に出なくても単位をあげることだ」なんて平気で言ってる大学もある。国立大学で、公開授業をやっているところは、僕らが掌握しているだけで１５あるのですけれど、その国立大学を組織して、公開授業の研究組織をつくっています。

現在「ＦＤ活動の第２期」にはいっていると思いますが、ＦＤ活動の啓蒙の段階はもう終わってしまいました。地道な自分の大学に合った授業研究をするといったところへ来ている。国立大学のなかでも、京都大学と和歌山大学とでは教育の問題の質が違うんです。それぞれ自分のところに合わせて日常的な授業計画をつくる、というところにだんだん話が移りつつあります。

僕は、授業はうまくありません。幸い京大の教育センターには、授業のとてもうまい大山さんという助教授がいまして、東大哲学出身で京大の臨床心理学の大学院を出た人で、予備校で教えていたこともある人です。この人の授業のビデオがあるので、少しお見せします。

（ビデオを映しつつ）これが大山さんです。楽友会館の２階を教室として使っています。学生が教室に入ってくるところに「何でも帳」が置いてあります。これは、学生との相互交換でつくります。書いてもらって、返してまた書かせて、こういうことを繰り返すわけです。１年間続けると、どの程度授業に集中したかということを、１年通して見ることができます。授業に良く参加した学生の「何でも帳」を読み返してみると彼らが自己探索のひとつの旅をしているような感じがします。授業に

使えそうなものを抜粋して、それ以後の授業に使う、ということもします。抜粋を紹介し、コメントを加えなどしていると、次の授業の４割がおわります。授業を見ているのは、研究スタッフで、後の授業検討会に出てくれる人たちです。（授業が終わった後の検討会の映像を見せながら）これが、検討会のメンバーです。２時４０分ぐらいまで授業をやって、検討会は６時ぐらいまでですが、センターに所属している先生方以外は京大からの参加者は少なくて、外からのメンバーのほうが多いという現実があります。

うちの高等教育教授システム開発センターは、教育学部の大学教授法研究会が母胎となってできたのですが、教授が２名、助教授が２名、講師が１名、助手が１名、大学教授法研究部門、大学教育評価システム研究部門、それから大学教育課程研究部門、これはカリキュラム部門ですが、この３部門で編成されています。大学院生、研究生のほかに、研修員がほかの大学から来ています。こうしたメンバーで、去年、公開授業をほぼ毎週やりまして、それが６年間続いているわけです。ほかに公開研究会を月１回。これも５０回を越えています。３月末には年１回の大学教育研究フォーラムというのをやります。

「京都大学の教育を考える全学集会」も、多くの部分はセンターが組織しているのですけれども、最初は、比叡山ホテルでやりました。２００名ぐらいの教官を缶詰にして、講演とシンポジウム、翌日分科会と総会をやり、昼飯を食べて解散します。比叡山ホテルの収容数が減りましたので、ここ数年は琵琶湖プリンスホテルを使用していますが、最初いやいや参加した人が酒を呑みながら３時４時まで話し、帰りのバスで「楽しかった」と言ってる、そんなことが続いています。

各学部のＦＤ研究会の多くにも僕らは関係しています。工学部、法学部、などが反応がよく、薬学、医学、経済学部もかなりよく、農学部は一部は把握していますが、様子のわからない学部も一、二あります。全学部の評価委員会にもやはりぼくらが関与しています。全学評価の報告書をつくります。学生に対する調査などもし、外部とも提携して事業をおこない研究する。けっこう、忙しいんです。

ところが、これだけやって僕らが京大のなかで関与している教官数は数パーセントです。たかが知れています。授業参加プロジェクトも一巡するのに、２、３０年かかります。徒労感もありますが、仕方ない。そういう調子でやってます。

教師の意図をすぐわかって、授業に参加してくれる、こんな学生ばかりだと授業はしやすいですね。教師の意図がよくわからず、すぐおりてしまう学生もつねにいますが、大体一割程度で、あまり問題になりません。医学部などに多いのは、教師の意図なんかどうでもいい、はじめからノル気はない、単位がとれればいい、というタイプです。教師の意図がわかっていてオリてる学生もいて、これがいちばんたちが悪い。

教師の意図がわかっていないだけの学生を変えることはできるけれど、それ以外のタイプの学生を変えることはとても難しい。最初から向こうをむいているわけですから。

僕自身の授業のビデオを見ると、あれこれ衝撃を受けます。下手ですからね。ところで、ある時、僕自身の授業の検討会で、女子短大の先生がいらだって言いました。「田中先生は、学生のわかる授業をやりたがってるわけじゃないんですね」と。学生がわかる授業じゃなくて、学生が考えてくれる授業って僕は考えるわけですが、それだと授業が成り立たない、学生を抱き留めてわからせる、そういう授業じゃなきゃいけない場合もある。このことはよくわかります。僕らも苦労しているけど、他の人たちも別の状況で苦労している、そういうことになると思います。

はじめに、FDがここ数年でどんどん変わってきていると言いましたが、FD事業も啓蒙型、伝達型から変わってきています。最初は伝達講習型あるいは研修型だったのが、自己研修型、自己組織型に変わってきています。自分たちの日常に即した授業研究、授業改善というふうに。最初の型の参加者は、来たくて来てるんじゃないので、効果は薄いんですが、この型をばかにしちゃいけない。この型では、パサーッと大勢を集めることができるし、マニュアル化も可能です。それにこの型をきちんとやっていないと自己組織だってできないわけです。現状では、双方をカヴァーしていく必要があると思っています。

結局、これまでやってきたところで今考えているのは、個々人の授業改善の工夫を積み上げていくという方法です。僕ら大学の教員は、教育実習もやっておらず、板

書のしかたや指導案の書き方のノウハウを蓄積し、伝達するシステムも持っていません。でも、調査してみるとわかるんですが、みんな結構努力している。授業でしんどい思いをしているのは自分なわけですから、工夫せざるをえない。その工夫が蓄積されず、あぶくのように消えていっているのは、残念です。

僕らは、大学という現場でFDを始めたばかりです。個々人のクリエイティヴな考え方と電子メディアの威力を用いてがんばれば、大学以外のところをあっさり抜いちゃうことも可能だと思うんです。僕が今しゃべっている、それをモニターする自分がいる。録音したり、ビデオに収録したりすることは、とても役に立ちます。学生の反応なんか、衝撃的にでますから。学生による授業評価も、工夫してカルテをつくって評価させれば、有効だと思います。いったん走りだしたら、大学の教員はけっこう強いと思います。ずいぶん遠くまで走るだろうと思うのです。できれば一緒に走っていただきたい、というのが今日の結論です。

演習篇「認知心理学（実験）」のビデオ制作にあたって

社会学部助教授 関口 理久子

専門演習の目的

私の心理学専門演習のテーマは、「認知活動の実験心理学的研究」である。この専門演習を通じて、学生が、人間の行動を実験心理学的に研究する方法を理解し、人間の認知活動に関する研究から自分の興味のもてるテーマを見つけ、探求することができるようになることを目的とする。２年間のゼミの授業予定は、次のようにしている。３年次では、各自興味を持った問題について関連する文献を自分で見つけだして読むことにより、卒業研究のテーマに結びつくように各自の研究計画を立てる。４年次では、卒業研究の具体的計画に従って、実際に実験を行い、データ収集と分析を行い、卒業研究を完成させる。

模擬実験の目的

本来、専門演習では、学生たちそれぞれの自分の興味のあるテーマがまずあって、そのテーマをどのように掘り下げていくかについて授業を進めてゆくことになるはずだが、実験的手法とはどのようなものなのか、データを解析し考察するとはどういうことなのかは、３年次生ではまだイメージすらわかない場合が多い。このため、模擬的な実験、すなわちパソコンなどを用いた実験の実施、および、データ収集、データの統計的分析、そして得られた結果の考察まで、通しで体験してもらうことにより、それぞれの卒業研究の計画をより具体的な視点から構想することができるようにする。模擬実験のテーマは、過去に卒業生が選んだテーマを用い、実験課題も、実際に卒業研究で行われた実験を多少修正したものを用いる。これらを紹介しながら、ゼミの卒業論文を閲覧させ、どのような研究があるか、そして自分はどのような研究がしてみたいかなどを具体的に把握できるようにする。

また、実験課題ごとのデータ分析方法を様々に体験してみることにより、実証的な手法を学習してもらう。

模擬実験の進め方

まず、３つのグループに分け、それぞれに、実験１、実験２、実験３を割り当てる。それぞれのグループが、データ収集、データ分析、結果についての討議、グループ発表の４週で完結するように授業を構成する。実験４については、別の時間（１コマ分）で、データ分析の方法を講義する。実験１、２、３の結果の発表は、実験の目的、方法、結果、考察をまとめて、１５分以内に口頭発表するという学会形式に沿って行う。また最後に、質疑応答や実験をやってみた感想や反省点などを話し合う。

模擬実験の種類と目的

模擬実験の種類と目的について、簡単にまとめると以下のようになる。これらの実験で得られたデータを統計的に解析する方法として、分散分析法や因子分析法を行う。

（１）実験１：潜在記憶のはたらき

潜在記憶とは、想起意識を伴わない記憶である。潜在記憶テストでは、通常、先行提示（プライミング）した場合には先行提示しなかった場合に比べてテスト時の記憶課題の成績がよくなるかどうかで検査する。また先行提示では、覚えるようにという教示はいっさい行わないのが普通である。今回の実験では、被験者に熟語を構成する漢字１字をプライム刺激として提示し、その後ターゲット刺激が漢字か擬似漢字（現実にはない文字）かどうかの判断をさせる課題（図１と表１）を用いて、意味的プライミング効果が見られるかどうかを検討した。

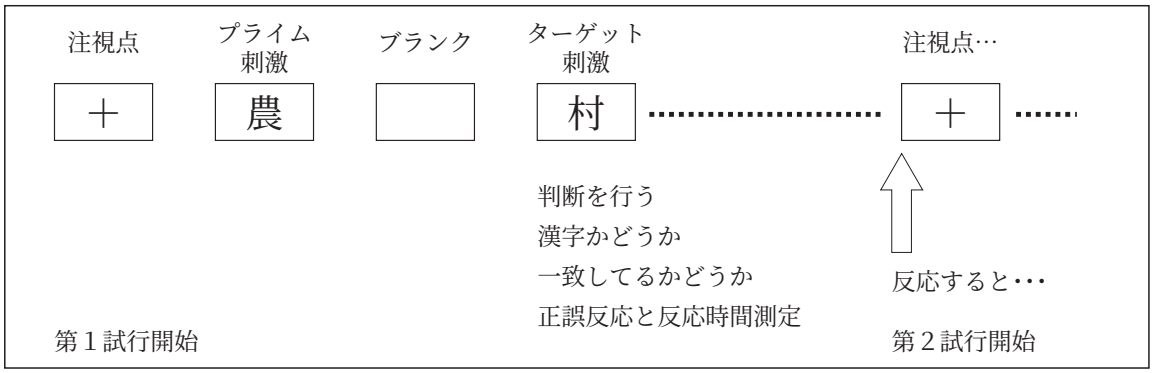


図１．パソコンによる実験１や実験２のプライミング法の手続きの概要

表１．実験１で用いた熟語の例（＊には疑似漢字が入る）

熟語条件	大阪	石油	砂糖	心配	動物	会社
非熟語条件１	□阪	□油	□糖	□配	□物	□社
非熟語条件２	時阪	板油	国糖	生配	午物	感社
擬似漢字条件１	大＊	石＊	砂＊	心＊	動＊	会＊
擬似漢字条件２	□＊	□＊	□＊	□＊	□＊	□＊
擬似漢字条件３	時＊	板＊	国＊	生＊	午＊	感＊
擬似漢字	軌	粧	汧	狛	飫	昉

（２）実験２：物体認知に対する記憶色の影響

記憶色とは、具体的事物と連合している色のことを言う。具体的対象物のなかには、典型的な記憶色を持っている対象物（例えば、みかんは橙色など）があり、私たちは対象物を認知するときに対象物の色も思い浮かべて認知していると考えられる。今回の実験では、対象物の同定について記憶色がどのように影響するかをみる実験である。方法としては、プライミング法（実験１と同様）を用いて、日常的な事物６種類（図２）の記憶色の検討を行った。

（３）実験３：音楽と認知機能の関係

モーツァルト効果とは、モーツァルトのピアノソナタは空間推理課題に対して促進効果をもたらすという報告によるものであるが、この効果については様々な議論が行われ、現在では否定されている。そこで、今回の実験では、最初に効果があるとされたモーツァルトのピアノソナタ曲（Piano sonata for two pianos in D Major K448）や、他の音楽（ビートルズのHey Jude）を用いて、心的回転の空間課題に対して効果があるかどうか、また音楽を聴く前後の自律神経系反応（血圧と脈拍）の変化などを検討した。

（４）実験４：図式顔による形態的要素と印象形成の関連

目の大きさ、唇の大きさ、眉の上がり下がりなど、顔の形態的要素が変化することにより顔の印象は大きく異なってくる。顔から受ける印象には、顔の形態に関するものの他に、その人の性格に関するものがある。今回の実験では、図式顔を用いて、目、眉、唇を変化させた22種類の顔について、性格特性語のペア（外向的な－内向的な、親切な－意地悪な、あたたかい－冷たいなど）12個を７件法で判定するＳＤ法により検討した。

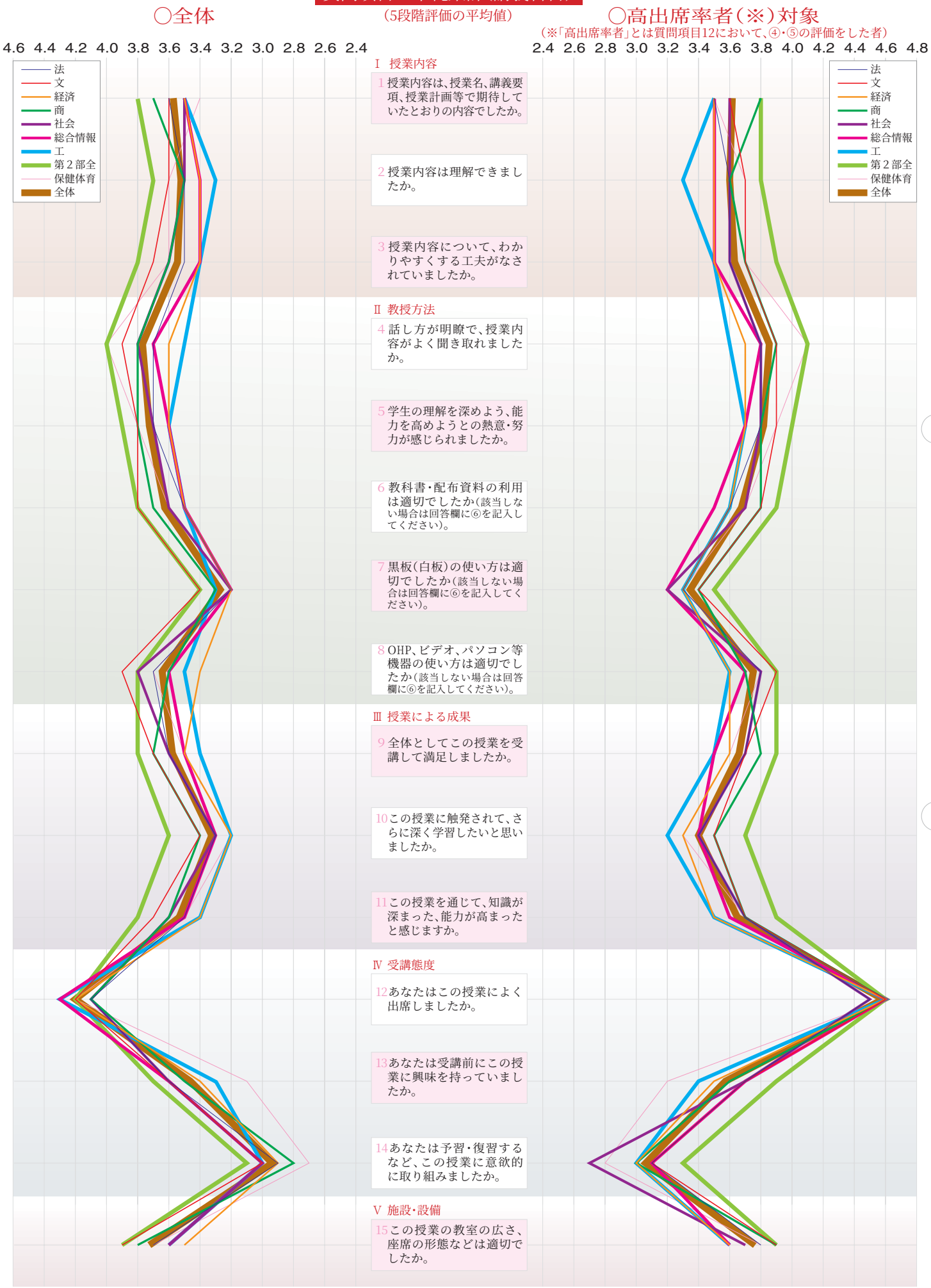
図２．実験２で用いたプライム刺激（単語）とターゲット刺激（図形）

図３．実験４で用いた図式顔の例

全体と高出席率者との比較グラフ

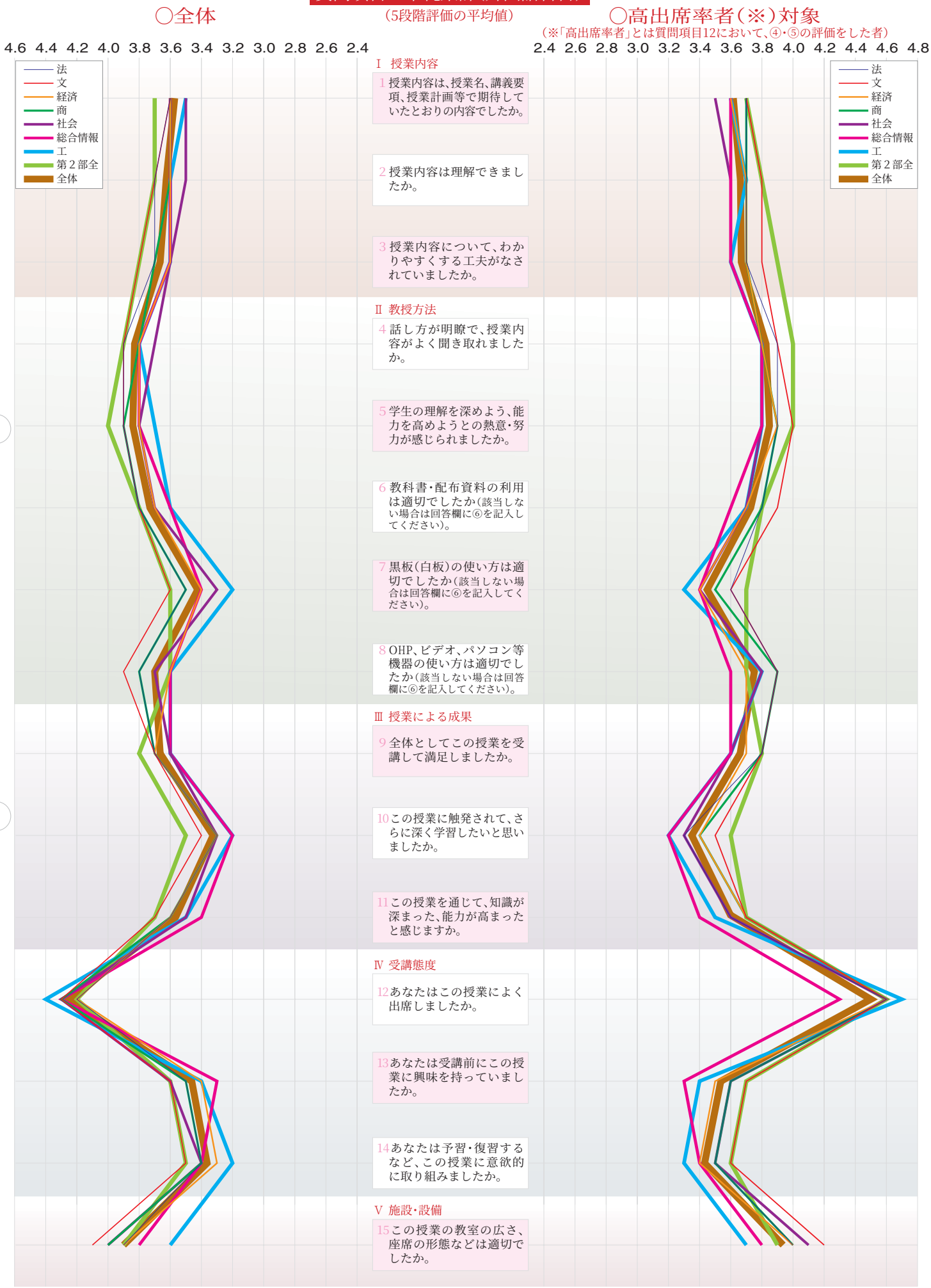
質問項目の単純集計（講義科目）

（5段階評価の平均値）



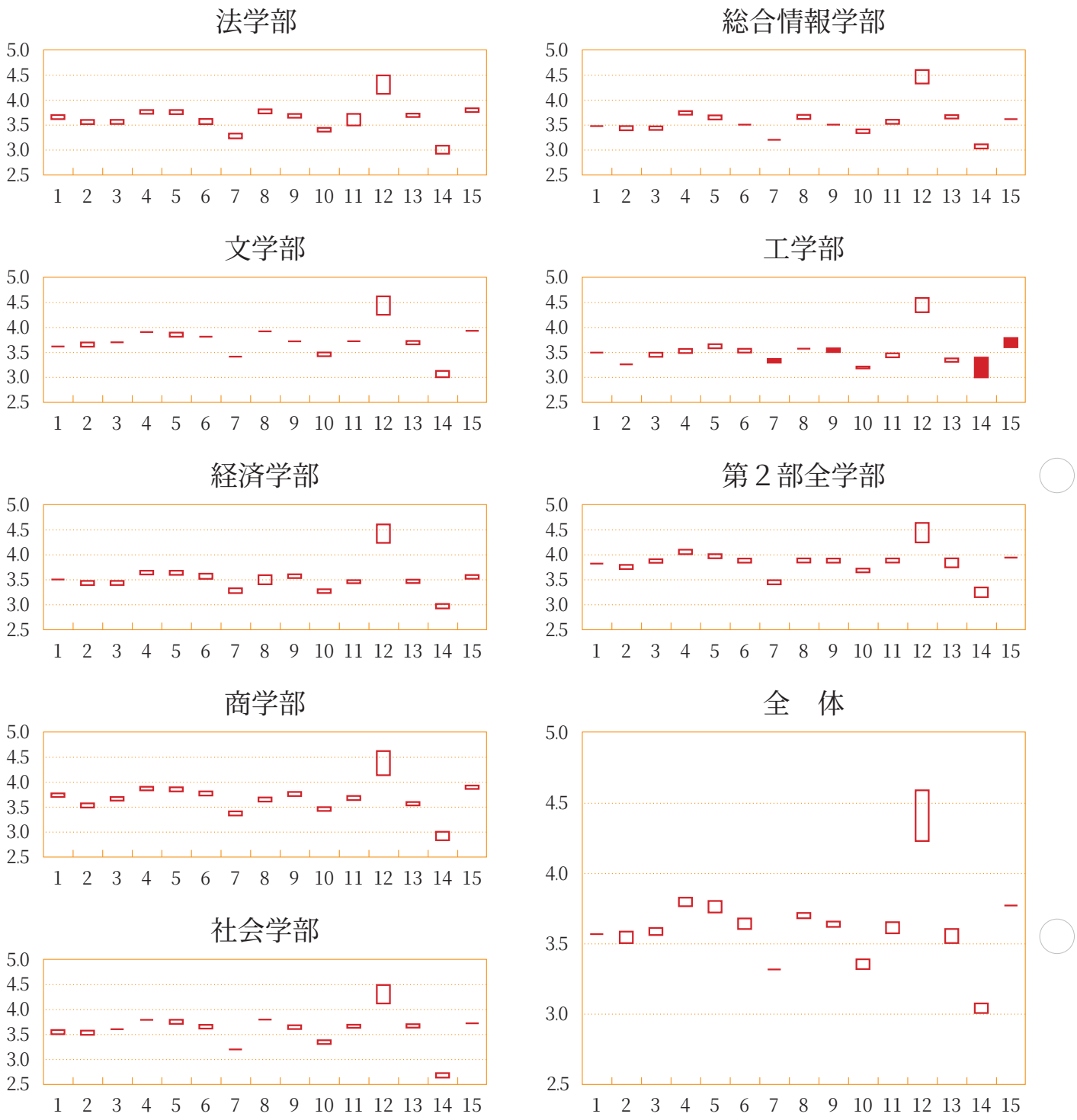
質問項目の単純集計（外国語科目）

（5段階評価の平均値）



全体と高出席率者との学部別比較グラフ（※ よこ軸:質問項目、たて軸:5段階評価の平均値）

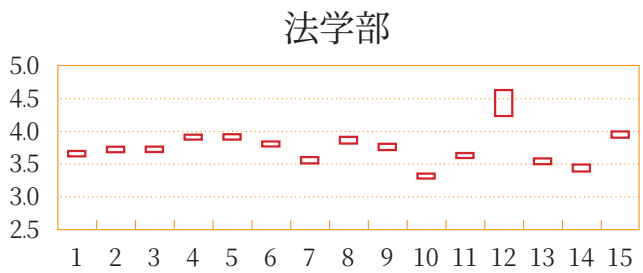
講義科目

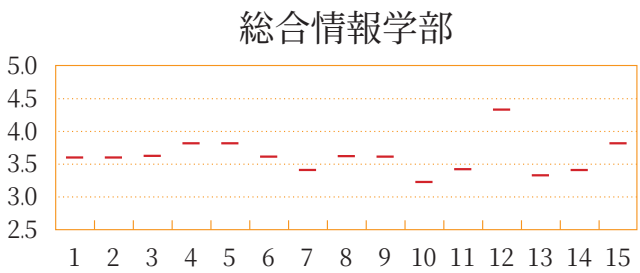


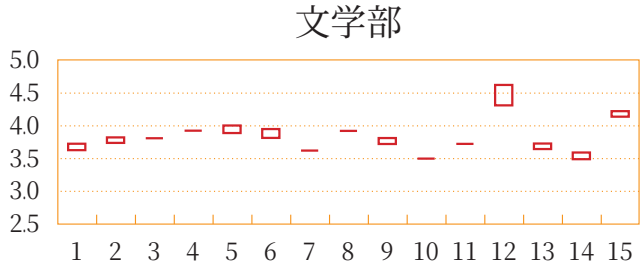
グラフの見方

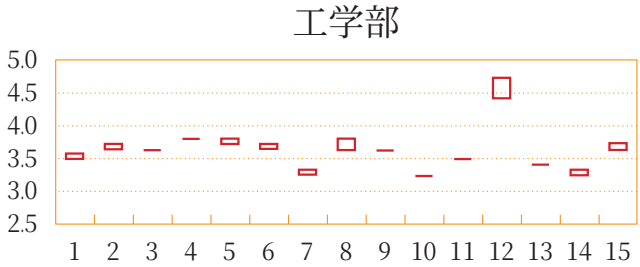
①全体の評点よりも高出席率者の評点の方が高い。
②高出席率者の評点よりも全体の評点の方が高い。
③全体の評点と高出席率者の評点が同じ。

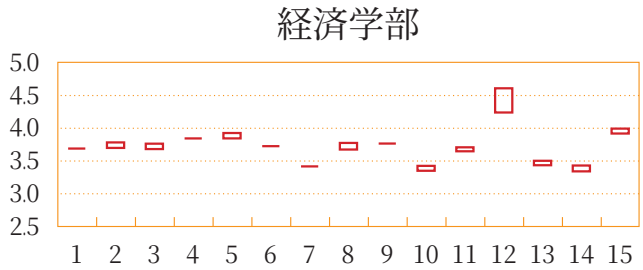
外国語科目

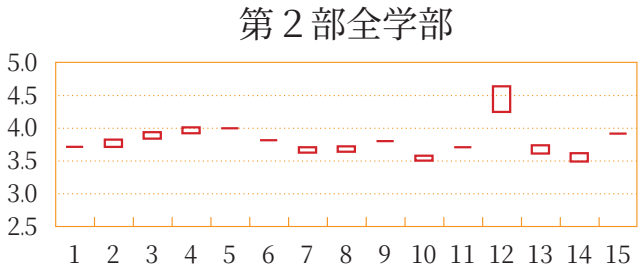


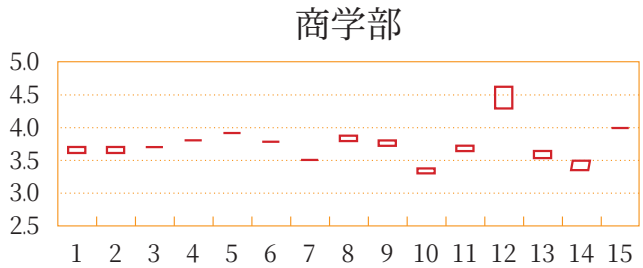


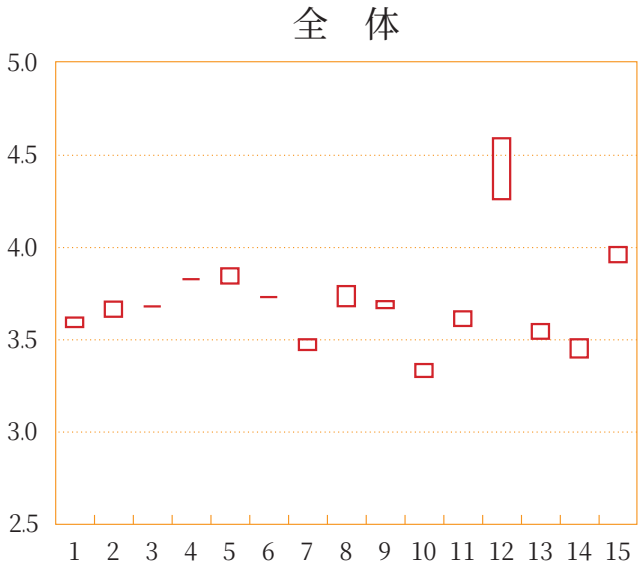


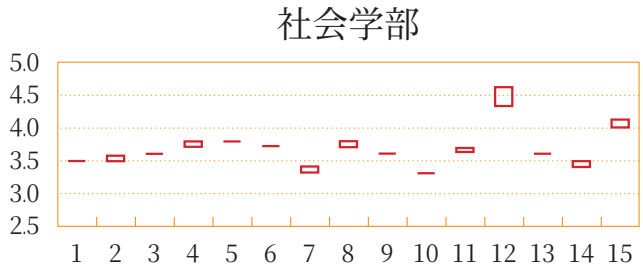












グラフからわかること

これらのグラフは、全体の評価と、質問12「あなたはこの授業によく出席しましたか」に対して「そう思う」「強くそう思う」と記入した者（高出席率者）の評価とを比較するために、株価の動向をわかりやすく表示するケイ線（ローソク足）を応用して作成した。従来の全体と高出席率者とを別にした折れ線グラフでは、学部間の比較には有効であるが、こうした比較には適していないからである。

これらのグラフを見てみると、概ね全体と高出席率者との評点差は質問12を除くと、ほとんどが0.1以下である（より絞って「強くそう思う」とした者だけを全体と比較すれば、より全体との差が開くかも知れないし、工学部については別途検討が必要である）。このことと質問12に対して「そう思う」「強くそう思う」と主観的に判断して記入した者を「高出席率者」と見なしていることの問題とを考えあわせると、こうした形で「高出席率者」を取り出してグラフ化することにどれだけ意味のあることなのか再検討されてしかるべきであろう。

（FD部門・授業評価部門委員会委員　長谷川　伸）

総合情報学部独自の質問 （実習科目について回答）

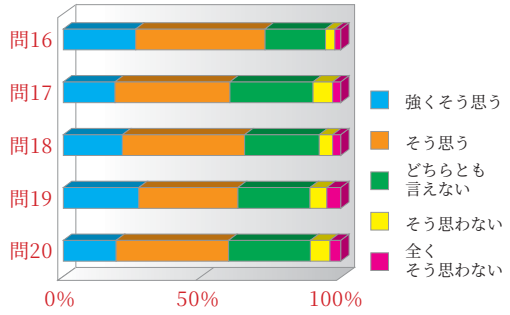
16 実習の設備・機器は授業の内容を理解するのに役立ちましたか。

17 実習の設備・機器は扱いやすかったですか。

18 実習の設備・機器に満足しましたか。

19 TAやSAの補助が実習の理解に役立ちましたか。

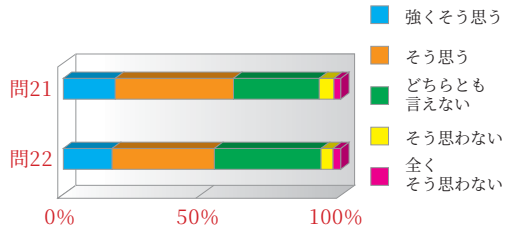
20 授業時間外での実習機材の利用に満足していますか。



工学部独自の質問

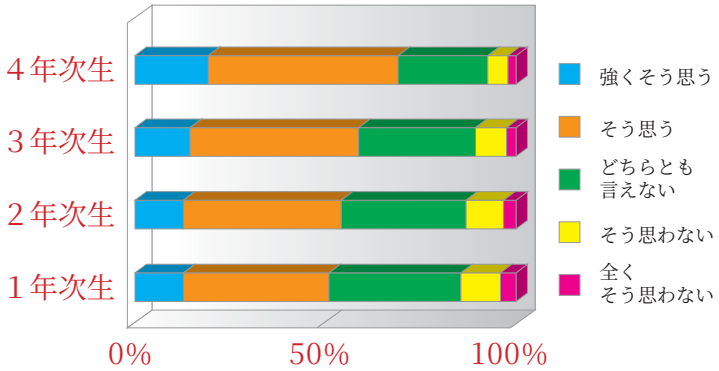
21 宿題・演習は、講義内容を理解するうえで効果的でしたか
（該当しない場合は回答欄に⑥を記入してください）。

22 担任者は、学生からの質問を奨励し、その質問に明確に答えましたか
（該当しない場合は回答欄に⑥を記入してください）。

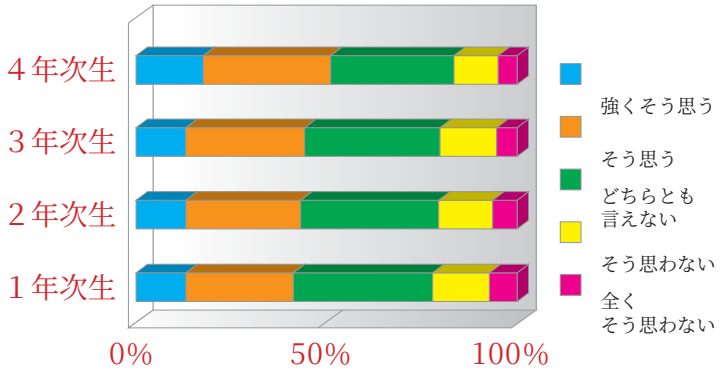


学年別単純集計（全学部・講義科目）

〈Q１〉授業内容は、授業名、講義要項、授業計画等で期待していたとおりの内容でしたか



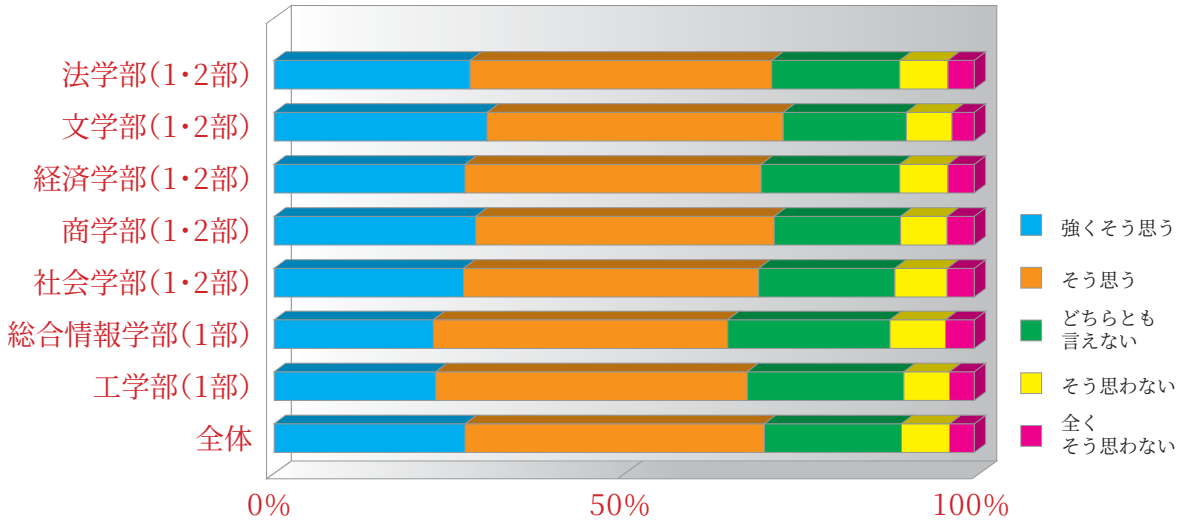
〈Q10〉この授業に触発されて、さらに深く学習したいと思いましたか



質問項目のクロス集計（学部別・講義科目）

「問13（あなたは受講前にこの授業に興味を持っていましたか）」で④・⑤の評価をした学生の「問９（全体としてこの授業を受講して満足しましたか）」の結果

全体としてこの授業を受講して満足しましたか



授業評価アンケート結果を読む

ＦＤ部門・授業評価部門委員会委員　長谷川　伸

今回（2001年度後期・秋学期）で3回目となる「学生による授業評価アンケート」は、より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き授業に反映させることが必要であるとの認識に基づき、2000年度から全学で実施されてきた。

わずかに低下した実施率

実施率は、科目数で見ると89.26%（3,342科目のうち2,983科目）、回答数で見ると38.08%（延べ283,493名中107,965名）となり、いずれも前年同期（第1回）と比べてわずかながら下回っている。より詳しく見ると、いずれの実施率も外国語科目では前年同期を上回っているものの、講義科目では下回っている。実施時点の出席率に強く影響される回答者実施率の変動はとりあえずおくとしても、試行期間を通じて趣旨が徹底されるに連れて上昇してしかるべき講義科目の科目実施率が逆に低下したことには注意しなければならない。

学部間で実施率にバラツキ

また、講義科目の科目実施率が92.68%から61.64%までと学部間にかなりのバラツキがあることも注意を要する。こうした事態の背景として実施者（教員）と協力者（学生）のところでアンケートを実施する意味づけに疑問が生じている可能性がある。実際にも、FD部門・授業評価部門委員会には設問項目について実に多様な意見が寄せられている。実施率の維持・向上のためにはこの点についても検討することが必要である。

アンケート結果は教室で活用

FD部門・授業評価部門委員会として利用・公表しうる集計結果は主として全学ないし学部平均のものである。このアンケートの実施対象である講義科目、外国語科目双方において、その授業方法には多様性が認められるし、授業改善が進むに連れてさらに多様化すると考えられるため、学部平均データから言えることは限られているし、限定的な意味しか持ちえない。

しかしそのこと自体は問題ではない。なぜなら、このアンケートの自由記述用紙は記入後担当教員に渡され、科目毎の集計結果は担当教員に返されることからしても、授業改善が各々の担当教員によって各々の教室から始まることを想定しているからである。アンケート結果はまず教室で活用されるべきなのである。

板書に対する評価の低さは何を語るか

全学・学部平均の集計結果を見ると、目立つのはやはり以前から指摘されている講義科目における板書に対する評価の低さである。では、現在教員各々が行っている板書のどこに問題があり、どう改善したらいいのか。

教室や黒板などハード上の問題か、教員の板書技術上の問題か。そういった自由記述から見えてくる問題もあろうが、それ以前の問題、すなわち授業における板書の位置づけについての教員と学生との共通理解がないことが、こうした結果を生んでいるのではないか。

学生は、板書をもれなくノートに書きとることを授業だと思っており、教員の話は単なる「おしゃべり」なのでノートにとる必要がないと考えている節がある。一方で、教員はわかりやすく説き聞かすこと（講話）が授業の中心と考え、板書は学生が聞き慣れない用語を書き示すためだけに用いているのかも知れない。学生にしてみれば全くもって不適切な板書が、教員にとってみれば適切なものなのである。

できるところから学生とともに授業改善を

私自身はこの学生の板書観―板書の授業における位置づけ―は改めるべきだと考えるが、いずれにしても教員と学生の板書観をある程度一致させることが必要であろう。教員の板書観を学生に説明するだけでも効果があるが、教員と学生が板書観をぶつけ合う場を授業中に設けたらなお良い。その際、今回の集計結果や自由記述をプリントにして配布するならば、討論素材として大いに役に立つはずである。もちろん、板書観の一致をみて改善方法が見つかるとは限らない。

しかし、その場合でもこうした場を設けることによって、(1)学生たちが協力したアンケートの結果を返して「義理」を果たし、(2)アンケート結果を受け止めて授業を改善していく姿勢を示し、(3)学生を授業改善のパートナーと位置づけることにより学生の主体性と責任感を養うことになる。こうした取り組みが広まれば科目実施率も向上しよう。こうしたイメージで、このアンケート結果を手に「できるところから」「学生とともに」授業改善を進めていくことがよりよい授業を創造していくためには大切なことなのかもしれない。

活動記録

2001.11.26～12.8	2001年度後期（秋学期）学生による授業評価アンケート実施
12. 5	第2回ＦＤフォーラム（テーマ「ビデオを用いた大学の授業研究」）
12.21	第１回ＦＤ研究会
2002. 1.23	平成13年度第10回ＦＤ部門・授業評価部門委員会
3.15	平成13年度第11回ＦＤ部門・授業評価部門委員会
2002. 4. 1	平成14年度 関西大学新任教員オリエンテーション
4. 3	平成14年度第１回ＦＤ部門・授業評価部門委員会
4.17	平成14年度第２回ＦＤ部門・授業評価部門委員会
5.15	平成14年度第３回ＦＤ部門・授業評価部門委員会
6.17～6.29	2002年度春学期・前期学生による授業評価アンケート実施
6.19	平成14年度第4回ＦＤ部門・授業評価部門委員会

平成14年度 関西大学新任教員オリエンテーションの開催

新任の専任教育職員が、本学の現状、教育目標、大学教育一般、教育・研究に関わる事項などを共有し、教育・研究活動が円滑に行えるようにすることを目的として、4月1日13時45分から17時10分まで、関西大学会館4階大集会室において、新任教員33名を対象に、つぎのとおり実施した。

① 本学の紹介「教育・研究方針を中心として」
　　河田 全学共通教育推進機構長(副学長[共通教育担当])
② ファカルティ・ディベロップメント
　(1)「大学における授業の改革」　:水越 FD部門・授業評価部門委員長
　(2)「学生による授業評価」　:長谷川 FD部門・授業評価部門委員
③ 法人関連事項の説明
　(1) 本学の法人組織と財政:石山 創立120周年記念事業局長
　(2) 服務・本学諸規程「制度と諸規程」:五藤 人事課長
④ 研究助成「学内研究費とその他研究費の手続き」:山中 研究助成課長
⑤ 教育施設の利用と手続き「図書館及び情報処理センターの利用方法」
　(1) 図書館の利用:影山 運営課長
　(2) 情報処理センターの利用:山本 システム管理課長

モデル授業ビデオの制作

授業をビデオに収録し、再生して、多面的な検討を加えることを通じて、授業の改善に結びつけることを目的として、平成13年度は、つぎの３科目の授業をそれぞれ約15分に編集し、各学部・外国語教育研究機構に配布した。
なお、総合図書館、視聴覚教室、MML室及び高槻図書室で視聴することができる。

No.	タ　イ　ト　ル	担　任　者	特　　色
第一巻	講義篇 「情報社会とコンピュータ」	総合情報学部助教授 小田原　敏	多様なメディアを活用した多人数講義
第二巻	演習篇 「刑事訴訟法演習(模擬裁判)」	法学部教授 森井　暲	法廷教室を使用した模擬裁判
第三巻	演習篇 「認知心理学(実験)」	社会学部助教授 関口　理久子	コンピュータによるデータ処理を中心とした心理学実験

第1回 ＦＤ研究会の開催

開 催 日	演　　題	報 告 者	会 場
2001.12.21	ＦＤの周辺にある諸問題	関西学院大学教授 浅野　考平	尚文館 ５０２ 講義室
	工学教育改善とＦＤ(JABEEによる工学教育プログラム認定への対応)	工学部教授 室山　勝彦	

FD部門・授業評価部門委員会委員

部門委員長	水越　敏行	総合情報学部教授			
委　　員	藤田　久一	法学部教授	雨宮　俊彦	社会学部教授
	雑古　哲夫	文学部教授	堀井　　健	工学部教授
	長久　良一	経済学部教授	齋藤　栄二	外国語教育研究機構教授
	長谷川　伸	商学部専任講師	市川　　明	大学事務局 全学共通教育推進機構事務長